語り伝えと書き伝え
―「歌津敵討ち」をめぐって―

川島秀一

一、はじめに

宮城県北部の気仙沼地方にホンヨミと称されていた人々がいて、講談本の類を村人に読み聞かせていた事例については「「本読み」の民俗」[1]の中で報告してみた。

そこで取り上げたホンヨミの十九例のうち、講談本の類に混じって「歌津敵討ち」と呼ばれる本を読み聞かせていた人が四例、本を持たずに語り聞かせていた人が三例見い出されている。その後の調査で、この「歌津敵討ち」を読んでくれた例を一例と語ってくれた例を数例、採集することができた。

ホンヨミが読んだ本のうち、この「歌津敵討ち」が特異な位置を示していると思われるのは次のような理由がある。

一つは、「歌津敵討ち」という本は、これらの聞き取り調査の事例内では「書き本」（写本）がほとんどであるという形態上の理由である。[2]講談本の多くが版本であることに対して、この本はホンヨミ自身か彼等の近辺の者が書き写して作成したものが主であった。数多く出版される版本がそれゆえに、蔵書家を除いて意識的に保存される可能性が少ないが、写本の場合はその希少性と、先代や近辺の者が書き遺したということが明らかであることが多いために、逆に意識的に保存される可能性が高い。そのために現在でも写本が発見される機会があり、過去のホンヨミのことを探るための具体的な研究対象に成り得るのである。さらに、ホンヨミと称される人やその慣行がなくなった現在においても、写本が作られ続けている事実がある。新しい例では、昭和五十六年（一九八一）・昭和六十年（一九八五）・平成五年（一九九三）に作成されている。なぜ、写本が作られ続けているのか、その疑問にできるだけ答えることを本稿の一つのねらいとしたい。

次に、内容に関することであるが、歌津（現宮城県本吉郡歌津町）という気仙沼地方に近い箇所での出来事を題材にしたという特異性がある。そのために、気仙沼や歌津地方では、今でも伝説化して語られることが多い。

最後に、その伝承方法についてであるが、書物を通しての伝承だけでなく、口頭による伝承も豊かであること。さらに、その書物や口頭の伝承が鰹船を通して広められていった場合が多いことなどが他の講談本による伝承と相違して顕著な点である。

以上のような「歌津敵討ち」のもつ形態・内容・伝承方法の特異性を生かして、再びホンヨミについて、一つの対象を追いながら、より具体的に報告を試みてみたい。特に、個人的な読書（音読も含む）がその語りに影響を与えているという語り手側の問題と、逆に語りの特色が新たな書物の作成に影響を与えているという書き手側の問題に焦点を定めながら、書承と口承との関わりなどを明らかにできればと考えている。

二、「歌津敵討ち」のテクスト

「歌津敵討ち」には現在のところ、作成年順に次のような十一種のテクストがある。原則として、版本は二重カギ括弧、写本あるいは作成本（レイアウト・書き入れ等自由に行なった自筆稿本）・集録本（資料集などに掲載されたもの）などは一重カギ括弧で書名を括っている。なお、欠本や新聞小説（気仙沼の「大気新聞」に昭和一〇年九月五日から一〇月一三日まで「歌津仇討物語―孝子お筆重治郎―」と題して二五回に分けて連載）、神楽の台本（「歌津仇討ノ巻　神楽神談儀本」）、小学校の郷土研究資料（昭和五五年）などは除いてある。

①「（表題欠）」（天保一二〔一八四一〕）
②「奥州歌津敵討　全」（推定明治十年代）
③『歌津仇討夢艸之枕』（明治二五〔一八九二〕・日新館発行）
④「歌津仇討　孝子お筆重治郎」（昭和四〔一九二九〕）
⑤「歌津仇討物語―孝子お筆重治郎―」（昭和一〇〔一九三五〕）
⑥「歌津仇討夢雙椛の巻の壹」（昭和一〇〔一九三五〕・『郷土の伝承』第三輯所収）
⑦「歌津仇討夢艸之枕」（昭和一〇〔一九三五〕）
⑧「歌津仇討夢艸之枕」（昭和三七〔一九六二〕）
⑨「歌津仇討古老譚」（昭和五六〔一九八一〕）
⑩「歌津敵討ち書」（昭和六〇〔一九八五〕）
⑪「歌津仇討夢惣之枕」（平成五〔一九九三〕完成）

この中で、確実にホンヨミに用いられたのは⑧と⑪のテクストのみであり、読み聞かせることを意図したことを明記しているのは④と⑤の類似本だけである。しかし、これらのテクストの使用法をめぐって、音読や黙読や語りなどが錯綜している様子なので、次に一冊ずつ説明を加えたい。特に、それらのテクストの書かれ方（作られ方）という書誌的な事項とともに、その読まれ方（用いられ方）という読書慣行を中心に報告していきたい。それらのものの作られ方が同時に、読む行為ひいては読まれるテクストの捉え方、理解の仕方を規定しているわけであるが、とりあえずは「テクストの中の潜在的な読者」と「現実の読者」については分けて考えていくことにしたい。[3]

①は、歌津町の高橋静男氏所属の写本で、現在のところ一番古いものである。元の所蔵者は歌津町上沢の小野寺寛氏で、気仙沼市に流れていたものを高橋氏が収集した。上沢はこの敵討をする姉弟が住んでいたところである。この本の奥書に「干時天保拾貳歳開正月

写之」とあるから、さらにこの写本の原本があったことが伺われる。「歌津敵討ち」と呼ばれる仇討ちがあったのは承応二年（一六五三）とされているので、それが事実だとすると事件からこの写本まで約二百年を経ていることになる。

②は、気仙沼市字長磯浜の守屋敬亮氏所蔵の五十五丁の写本である。仙台藩筆道職の木戸有義所蔵本からの写本と伝えられ、この原本は⑪の原本と同じである。奥書に「守屋伊八郎筆也」と記され、明治四年生まれの三代前の当主の写本であることがわかる。伊八郎は家族に「戦物（いくさもの）」の本を読んでくれたり「八甲田雪中行軍」の話をしてくれた人というから、この本も読んであげたかもしれない。

③は、宮城県登米（とめ）郡登米（とよま）町で発行された唯一の活版本であり、同町入谷の須藤俊夫氏が所蔵しているが、これも気仙沼にあったものを購入したものである。明治二十五年に「正價金拾八錢」で販売され、「編輯兼發行者　宮崎新一郎」・「印刷者　河内喜作」・「發行所　日新舘」がすべて登米町であり、編集兼発行者と発行所とが同じ番地である。奥付の裏には、同じ発行所から出版されている『算術例題』（登米数学研究会編纂）の広告があり、日新舘自身を「書籍雑誌新聞勉強取次販賣所」と規定している。元所蔵者が気仙沼の新聞販売店であったことと関連しているのかもしれない。

書誌的な事項を述べると、七二ページ（ノンブルは柱に和数字で縦に組まれている）の袋綴じの和装本形式であり、表紙は仇討ちを果たす姉弟（お筆・重治郎）とその伯父多力坊の四色刷りの絵が大きく描かれている。本文には表紙と同じ絵師小林習古の一色刷りの挿し絵が一枚、二〇ページと二一ページの間にハトロン紙と共にあり、二〇ページの本文と照合するように、表紙の三人が浅草の観音様の拝殿で寄り添って寝ている姿とそれを見守る観音様の姿を描いている。表紙の次には、表裏二ページの上段に「歌津仇討夢艸之枕序」、下段に「目次」が朱で印刷されているが、目次にはページを付してなく本文との照合はできない。その次のハトロン紙の後に薄い蓬色を地とした本扉が一枚、幽霊のような姿と「仇討」・「夢艸の枕」・「實説美譚」という文字が白抜きでレイアウトされている。

「歌津仇討夢艸之枕序」は表と裏とでは内容と文体が少しちぐはぐであるが、ここに引用しておく。

（表）夢艸之枕ハ元ト誰が手ニ業平ノ花モ實モアル譚リ空シク破筐ノ底ニ埋メ蠹魚ノ腹ヲ肥スニ忍ビズ之ヲ出版シテ明治ノ空気ヲ通シ度ク希ハ色ヲ添テヨト日新舘主ノ切ナル望ニ聊カ蛇足ヲ補ヒタリ　有待樓主人寛識

（裏）頓テ御贔屓奥州の言葉訛レド美實録仙臺万部摺出シテ首尾モ本吉残リナクみんこと賣手ヲ歌津濱盡ヌ眞砂ノ御愛顧ヲ續ケテ再版成升ヤウ花客ニ願フ筆ノ腰折テ夢艸之新イ枕運ト通報ニ寝覺ヨク完爾々膳ニ居直リテ先ヅはし書ヲ塞クト云フ　明治廿五年八月

一読して、「表」は「歌津仇討夢艸之枕」の出版するに至った理由、「裏」はその広告文案らしく、「表」に比べて語呂が良く、地口に近い表現が多い。たとえば、「仙（千）臺万部摺出シテ首尾モ本吉（良し）残リナク」というような地名をもじったものや、「膳

ニ居直リシテ先ヅはし（箸）書を塞ク」などが読める。

ただし、この「序」からは次のようなことが理解できる。一つは「空シク破筐ノ底ニ埋メ蠹魚（紙魚）ノ腹ヲ肥スニ忍ビズ」とあるように、近世からの写本などを原本にした出版であったことである。もう一つは「賣手ヲ歌津濱」とあるように、販売市場にねらいを付けていることである。後述する⑩の写本の原本はこの版本であるが、それは本吉郡志津川町の荒戸浜にあったそうである。しかも、この浜には同じ本を所有していた家が二軒あり、いずれも本家格の旧家であった。登米という北上川以西の内陸部での出版物が気仙沼・本吉・歌津・志津川などの沿岸部に数多く流れたものと思われる。

④と⑤は、双方共にガリ版刷りの類似本であり、④は歌津町の高橋静夫氏が、⑤は気仙沼市立図書館で所蔵している。④は「頒本の趣旨」・「物語の梗概」・本文と続き、柱には算用数字でノンブルが付され、五八ページの本である。⑤は、家・林・月が描かれている挿し絵のある表紙・「頒本の趣旨」が載せられた本扉が続き、次に見開き二ページに渡る「物語の梗概」、その裏に目次があるが、本文とは照合できない。本文は七四ページで終えており、特に奥書はない。④の表題の「歌津仇討　孝子お筆重治郎」が六年後の昭和十年には「歌津仇討物語―孝子お筆重治郎―」と「物語」の語が付け加えられ、目次も書き出されていることがわかる。さらに、⑤の表紙には「名足小學校」（現歌津町）の名も見えることから、小学校で制作されたものと思われる。しかし、これらの本は、必ずしも生徒だけを読者としたものではないことは、次に引用する「頒本の趣旨」から推定できる。「頒本の趣旨」は④と⑤共に同文であるが、④には「高瀬」という著名があり、当時の伊里前小学校（現歌津町）の高瀬一夫訓導が作ったものと伝えられている。

「この物語は白石噺と共に郷土の美談として昔より歌によまれ劇にくまれ世にはやさる誠にこの物語を生み出したる歌津の誇りとする所なり。然るに本書の所有者少くかき本として村中に稀にあるのみ。随て読むもの少くなり行きてあたら美談の次第〳〵にうすらゆくをうらみとし、茲ニ印刷にふし数多の人に頒ちよませ、この誇を永久に残し、且つ又世の亀鑑となさん。この物語の実否を索むるによしなれど、村の中に遺跡として傳説もあるべければ孝子として親の仇を討ちしことは事実なるべし。後の人この事実に多少脚色をなし今日に傳ひしものならん。かせぎのそのひまに、これを繙き、又よみきかせて、心のかゞみの一端とせられなばこの上なき幸ならめ。

昭和四年一月五日　　高　瀬　一

この「頒本の主旨」からは次のようなことがわかる。一つには、「昔より歌によまれ劇にくまれ」ていたこと。次に「かき本」（写本）として村にわずかに遺っていたこと。また、「これを繙き」（黙読）、「又よみきかせ」（音読）ることを、ねらいとしたものであることがわかる。

さらに、「茲ニ印刷にふし数多の人に頒ちよませ」という表現からは、昭和初期の地方における「騰写版」という新しいメディアに

対する多大な期待が伺われる。[4] 当時の学校教育では謄写版が必需品であったわけだから、この本を作成した者がその技術を習得していた教師であったこともうなづける。しかも、「かせぎのそのひまに」読ませようとしたことは、労働時間の「余暇」の読書を想定していたわけであって、労働の場で読み聞かせていた当時の村のホンヨミとは別な方向を打ち出している。また、そのことが逆に当時の学校教育に関わる者から捉えられた一面的な読書観を示しているように思われる。

⑥は宮城県教育会で編集をした『郷土の伝承』の第三輯に活字で掲載されたもので、原本の書誌的な事項は不明であるが、第二輯の「編輯後記」に「頁数の関係で乍遺憾採録しかねたものに、清水東四郎氏の天保…源新治氏の歌津仇討物語の原稿がある」[5]とあるから、本来は第二輯に掲載するはずだった、清水東四郎氏所蔵の天保年間の写本であったことだけがわかる。「名足小学校」で制作された⑤と同年のものであるが、この年はガリ刷りの写本・版本の郷土資料集に加えて、気仙沼の地方新聞にも連載されており、様々な形態のメディアを通じて「歌津敵討ち」が公共性を得たピークの年であったと思われる。これ以降の戦後から現在にかけては、再び個人的な写本や作成本が目立ってくるのである。

⑦も同じ昭和十年に、「大津保村大籠」（現岩手県藤沢町）で、畠山忠之進翁が③の版本を写した本である。それを、本吉町の佐藤静夫翁がさらにコピーをして本を作成し、現在は大籠（おおだこ）の高橋義男氏が所蔵している。本扉の裏に③の表紙と同じ絵が描かれ、次に③の序の表に当たる文章が一ページ、③と同じ目次が三ページ、③の挿し絵ページと同じ絵が一ページ（原本にはなかった「浅草觀世音様於筆重治郎に御示現の圖」という説明書きがある）と続き、それから本文に入って一〇〇ページのノンブルが下欄に算用数字で付している。「改良十二号」の竪罫紙にペンで書かれたものらしい。

高橋義男氏（昭和四年生まれ）のお話では、昭和八年頃、下大籠（しもおおだこ）神楽がこの本から台詞を拾い上げて神楽の台本（現在不明）を作成し、歌津町の名足（⑤の作成地）で神楽を演じたという。[6] ④と⑤の「頒本の趣旨」で「劇にくまれた」と表記された一つの根拠となるであろう。後述する⑩も、③の版本から写したことを考えると、写本から版本の流れだけでなく、版本から写本への伝承の仕方も考慮に入れざるに得ないだろう。しかも、⑦は版本→写本→神楽の台本→神楽と変容され、⑩は版本→写本→語りと、確実に書承から口承へとたどっているのである。

⑧は「歌津仇討ノ巻　神楽神談儀本」（一二丁）と同じ筆者による二十二丁の写本であり、鉛筆で竪の罫線を引き、一ページに十四行を書いている。奥書に、「現在所茨城縣稲敷郡牛久町冨士山鳥常荘内　本籍宮城縣登米郡中田町上沼大泉石崎九九　錦織嵯峨立風流豊年舞一行　元舞長　藝名尾上泉花」と記してあり、他に本名の「後藤義雄」という名も見える。現在この写本は嵯峨立（さがだち）神楽保存会（現宮城県東和町）の会長菊地哲治氏が神楽衆の共有物として所蔵している。その嵯峨立神楽と同じメンバーで、神楽だけでなく踊りを主とした地芝居を行っていたのが「嵯峨立風流豊年舞」であり、

本吉郡の浜々へ公演に行った時期があった。

嵯峨立神楽では「歌津敵討ち」の演目のことを「歌津キュウト（仇討）」と呼んでいたが、浜では大変たいへん人気のあった神楽であった。しかし、人員不足のために二～三年でこの演目は止めてしまったという。その「歌津キュウト」を演じたことのある高橋邦雄翁（大正一一年生まれ）によると、この写本は、神楽衆の一員であった後藤翁が近所にいた筆の立つ人に頼んで書いてもらったものだという。

しかし、この写本以前にも同じ本があったそうで、戦後、後藤翁が浜へ米を運んでいたときに歌津から本を借りてきて、神楽の台本にするために写したそうである。行書体の文字を読むことのできた高橋翁はその本を神楽衆の前で読み上げる役割をしたが、彼等はそれを聞きながら、自分が演じられそうな好きな役を選択したという。翁によると、本を読むときには棒読みでは感情を込められないので、当時の年寄りたちが新聞などを読むときに付けていた節を用いて読んだという。また、写本の回し読みをしたこともあり、特に自分の役の台詞などは書き留めておいたものだという。[7]「神楽神談儀本」の末尾にも「この神談儀は全員で書いて全員覚へて置く必要が有る事」とある。

この写本も⑦と同様に神楽の台本の原本として利用された本であり、昭和の初めに「歌津敵討ち」を神楽で演じたのは、下大籠、飯土井・嵯峨立などの、本吉町から中田町へかけての街道沿いの山間部の神楽衆しかなかったようである。

⑨は宮城県本吉郡唐桑町字小鯖の鈴木多吉翁（大正八年生まれ）が宮本唐村というペンネームで作成した本で、便箋二冊（「前編」五一枚・「後編」四六枚）を用いて書き記している。便箋は竪罫紙の中央に横線を引いて二段に分け十五字から二十字くらいで改行している。また、「ですます調」で書かれ、会話の部分はカギ括弧で括り、ルビもふるなど、全体を読みやすくしている。

この作成本は、多吉翁が、同町字小長根の故吉田忠八翁（明治三一年生まれ）が所蔵していた写本を元に、わかりやすく書きまとめたものだという。忠八翁は「歌津敵討ち」を読んでいたとともに、多吉翁などに語り聞かせてもいる。そのことが翁に自作の本を書かせる機縁になったことは、表題の「歌津仇討古老譚」からも知られ、「初めに寸言」という中にも、次のように詳しく記されている。原文は「忠作」という仮の名を用いているが、そのまま引用してみる。

「　初めに寸言

機関室の当直を終えた私が、汗と油に汚れた、顔や手足を洗いに、船尾にある炊事室に行くと、聞き馴れた忠作老の胴間声が、船尾甲板の上から流れて来た。聞くともなく耳にしてゐると、どうやら歌津仇討の話しを初めるらしい。歌津仇討の其の片鱗しか知っていない私は、兼てより其の全貌を知りたいと思ってゐた。私は物語り風の話しを、老から聞くのが好きで、七十才に手の届く忠作老から、これ迄にも数多く聞いてゐる。老はまったく話し好きで、記憶が良く、なかなか話しが堂に入って巧みである。私は此の機会を逃さずと、大急ぎで汚れを洗い落し、船尾甲板上の

忠作老の膝下へと急いだのである。

七月初旬の天候は快晴、微風が汗ばんだ肌に心地良く、海上は平穏、我等が第五勝栄丸は、魚獲した鰹を魚艙一ぱいに積み込んで、船足も重く、懐かしき母港えとエンジンも快調に、一路全速にて航走する。

みればすでに、同好の者が六・七名車座になり、褌し一つの上機嫌な忠作老を取囲んでゐた。話しは今初めたばかりであった。私は早速車座の一員に加わり一語も聞き洩らすまいと耳を欹てたのである。

「そも〳〵此の歌津仇討は、何から端を発したかと云うと」と忠作老は徐に語り初めた。

これより以下は都合上、忠作老人の話しを元にして、愚生が拙いペンにて物語り風に纏て見たのでありますが、乞い願わくは、読者諸賢の諒とせられんことを・・・・」

鰹船の甲板の上で、陸地との往来の間に「物語り風の話し」を語られていたという伝承現場が手に取るように理解される序文である。多吉翁の話では、忠八翁は「歌津仇討の話し」を一時間くらいずつ四〜五回に分けて語っていたという。語りの口調には少し節があり会話の部分では、たとえば女性が語るところでは声色を変えて上手に語ったという。多吉翁はそれをそばで筆記しながら聞いていたという。話を終えるときには「今日のお話はこれにて終わり」と語り、車座になって聞いていた船員たちはそのときに拍手をしたという。忠八翁は「唐桑の歴史の話」なども上手に語る人だったそうである。[8]

この事例は語りとして聞いていた記憶が後年になって本を作らせる動機になった例だが、⑩の事例はそれとは逆に、幼いときの読書（黙読）の記憶が老年になって写本を志し、ついには語り手にまでなった事例である。

⑩の写本の原本は③の版本であり、それを写した宮城県本吉郡志津川町荒戸浜の佐藤きくよ媼（明治四四年生まれ）は、同浜にあった二つの同じ版本（一つは本家で所蔵）をもとに筆写したという。昭和六十年頃、病院での夫の看病のかたわら筆写を志し、初めは新聞の折り込み広告の裏面などを用いて書き始め、何冊も書き上げては人に贈呈したという。きくよ媼はその後、老人クラブの会合などで、本を持たずに、この「歌津敵討ち」を語り続けることができるようになったという。[9]

テクストとして挙げたのは、歌津町の高橋静男氏所蔵のものである。B4版の西洋紙を二つ折りにして細いマジックペンで書いたもので、上の余白に算用数字のノンブルがふられ、六三ページの複製本であり、表紙の次の本扉の位置に③の挿し絵がコピーされて綴られている。

⑪は写本の完成年が平成五年という一番新しい写本であるが、②の写本の原本とつながり、その原本の写本と②とを参考にして作成したものである。そのことの事情については作成者の小野寺惣衛翁（大正三年生まれ）が次のような「あとがき」と原本所蔵者の紹介を記している。

「　あとがき

この原本は本家（清水家）に傳るもので父惣左衛門永らく読み居りしものなるも長兄、次兄等も読む永年保存管理悪しく乱本となりしを小生写本を思ひ立つ昭和二十四、五年頃か（前文三十二、三枚）、完結しない間に分家独立の時季となり筆を置くこと拾四五年漸く気分も落着き続行を思ひ立つ昭和三十七、八年頃か原本尋ぬるに本家新築の折行方不明となり一次断念して居りしが小生この本永年読み続ける故概略存じ居る故記憶をたどり個條書きにして漸く完結したり平成五年一月其の後上かじや先代伊八郎同本を写本してあるを知り借り受けて写本漸く完結する（末尾紙質の違ふ部分）

この原本は木戸有義（仙台藩士）の書本なるもこの本の外に水戸祭禮記、節儀両面鏡武記（写本済）等有り又太閤記拾段目等もありしがこの本は貸し無くしたと言へ傳へられるが現在は一冊も無し

木戸有義について

仙台藩士筆道職と傳へられる廃藩の為職を失へ流れ流れて当地に来り「廃寺」（現島倉屋敷）にすみ住み当地の若人達に讀、書、算教へて居りしが生活ままならず食に窮し弟子達互持寄扶持して居るその糧かせぎに書本等致し居る旧藩士なれば明治二十九年三月三日鮎貝家に招かれ餅を馳走になるに餅のどに支へその場にて窒息死すると聞く弟子達及び契約講の人を世話し葬儀をなす石碑も建てて供養する石碑は現在海蔵寺墓地にあり法名に曰く修学木戸有義居士と

平成五年五月書く

小生　時に年八十歳　」

惣衛翁は本家にあったこの原本を父親の惣左衛門翁（慶応元年生まれ）から読み聞かせられてもいる。読んで聞かせるときは、文語体の文章をしばらく読み上げたあとで、そこまでの要約をわかりやすく噛み砕いて語ってくれたという。また、父親は縁側と座敷の間の敷居に腰をかけ、一人で本を読むときにも声を出していたそうである。そのようなときに側に座って耳を峙てていたのが、幼い頃の惣衛翁であり、初めの部分などは暗唱ができるという。また、「あとがき」の中に「小生この本永年読み続ける故概略存じ居る故記憶をたどり個條書きにして漸く完結したり」とあるが、要約する力は翁の長年に渡る黙読の結果であるとともに、父親から「要約」まで口承によって伝えられてことにもよると思われる。父親の惣左衛門翁は仕事から離れたころに生まれた末子（惣衛翁）を相手に本読みだけでなく多くの昔話を語っており、惣衛翁もその昔話の伝承者であり、すぐれた語り手でもある。「歌津敵討ち」こそ昔話化して語ることはなかったが、話を要約する力のある者はよき語り手に成り得たものと思われる。

長兄や次兄もその原本を鰹船に持って行っては読んでいたためにページをめくるところが綿のようになり、そのために写本を志したという。また、その頃、惣衛翁は三才になる子を亡くし、翌年の正月には新年を祝うこともなく時間が空き、心をまぎらわせるために

筆をとったとも言う。[10] ガラス板の下に電灯を置き、上に原本と、さらにその上に写本の紙を置いてなぞった一種の「透き書き」であり、その部分が三十五丁、平成五年の追加分が十五丁、「あとがき」等が四丁の、完成までに四十年以上もかけた和綴の写本である。

以上のテクストの他に、現存していないが、次のような「歌津敵討ち」の書物に関する情報が採録されている。まず、庚申講などの講で読まれた本が気仙沼市内の山間部で二冊、家庭や村で回し読みされた本が気仙沼の大浦（版本）と小々汐（写本）という漁村に、それぞれ一冊ずつ所有していた。その他、本吉町の小金沢（写本）・歌津町の払川（写本多数）と田の浦（写本多数）・同町韮の浜（写本）・志津川荒戸浜（版本二冊）などにあったと言われ、敵討ち事件の舞台と沿岸部に沿って多いことが注意されるようである。

それでは、口頭伝承の世界ではこの「物語風の話」はどのような特色をもって伝えられているだろうかを、次に報告していきたい。

三、「歌津敵討ち」挿話の意味

まず、この「物語」の要約については、前述した④と⑤のガリ刷り本に「物語の梗概」として載せてあるので、これを引用してみる。

「承応年間本吉郡歌津村に治左衛門といふ百姓あり。二人の子女あ（り）て姉をお筆、弟を重治郎といひ、家庭甚だ圓なりき又爰ニ會津生れの松岡主水とてこゝに住み剣術の指南をなせり。然るに主水、治左衛門の妻に心を寄せ如何にしてか己の妻にせんと百方心を砕けども真から貞操正しき女なれば己に靡かすこと能はずされば主水大いに憤り夫婦もろとも殺害し、行衛知れずなりける遺子お筆重治郎幼少なれど「親ほど大切なるものなし、如何で晴さで置くべき」と伯父治兵衛の助力を得、仇を討たんと出で立ちけり。先ず江戸に着き浅草観音の引合せにより笠島主膳が家にて武術を習ひ、その仇敵の行衛を尋ねんと廻國せり。然るに敵と思しき者をさがし得ず、その上伯父に逝かれたり。されど兄弟は少しも気落せず、或は立山大権現の御（ママ）により、或は秋田三吉。岩城大権現の御導きにより、漸く津軽領なる高田ヶ嶽に見出しけり。敵はこの時三雲弾正と改名し盗賊の大将なりき。七ヶ年の苦心も空しからず。神佛の加護により目出度親の仇を報じて大望達成のこの時兄弟の心のうちは如何ならん、其の後弟重治郎は杉野姓を称へ、仙台公綱宗に召しかゝへられて知行二百石を頂き、姉お筆笠島主膳の子貞四郎が妻となり、兄弟もろともに目出度き春を迎へけりとなり」

この梗概の内容が口頭伝承ではどのように伝えられているだろうか。昭和五十七年に東洋大学民俗研究会が本吉町の小泉で民俗調査を行ない、その報告書『小泉の民俗』[11]の「口承文芸」の中に「歌津仇討ち」と表記して三例ほど掲載している。「口承文芸」の中の「世間話」に分類しているところが、「歌津敵討ち」などの口頭伝承の扱いにくさを明らかにしているが、その中から一例ほど掲載してみる。採録者による表記の間違いは「　」の中に正しいものを示した。

「〔歌津仇討ち〕　上沢治左衛門という人の奥さんに、松岡主水が横恋慕し、カドヤの茶屋で治左衛門と待ち合わせ、酒を飲ませて酔いつぶれさせ、今の奥州浜街道を通って、草木沢というところへ行き、そこで治左衛門の家へ行って、奥さんを自分のものにしようとしたが、失敗して奥さんも殺してしまった。このとき、二人の子供がいたのだが、馬の鞍の下に隠れて助かった。おふで十〔重〕治郎というその姉妹は、樽木〔多力〕というおじさんのもとで修業をし、そのうちに、松岡主水という仇が山に立て籠っていることがわかり、そこに行って、首尾よく仇をとった。その後、親の供養をするために修業した。（新町　千葉東氏）」

しかし、口頭伝承の「歌津敵討ち」は、このほかに一つの挿話の方が顕著に伝えられている場合がある。[12] それは、前述した梗概の中で、姉弟が立山大権現の御加護に遇う場面であるが、立山で迷った二人が、かつて郷里に近い所に住んでいた尼僧に出会い、その尼僧が自分の過去の罪悪を語る「懺悔語り」の部分である。たとえば、天保十二年の写本の目録で「三人廻国東西別之事　附り越中立山因縁物語り事」とある中の、その「附り」の部分である。

話者に対して「歌津敵討ち」について語ってもらうときに、「この話と仇討ちの話との二つがあって初めて「歌津敵討ち」が成り立つのだ」と説明をする話者がいるだけでなく、なかなか仇討ちの本題が口に出てこないでこの挿話だけに終始する話者の場合もある。プロットのレベルでも、たとえば日新館版の目録で「附　因縁物語の末敵の在家お聞出す事」とあるように、お筆と重治郎はこの尼の「懺悔語り」の後で敵と出会うことになり、重要な挿話になっている。前述した『小泉の民俗』にはこの挿話が「漁師のボウレイ」と題して、やはり「世間話」の中に採録されているので次に引用してみる。

「〔漁師のボウレイ〕漁師が時化に遭い、難波してしまった。その漁師は助からないと諦め、自分が死んで浜に打ち上げられたら供養してもらおうと胴巻きに金を入れた死体はスズホソラ〔清水細浦〕という浜に打ち上げられたが、死体を見つけた人は金だけを胴巻きから盗み、死体を海に押し返してしまった。やがてその人は金持ちになり、欲しかった子供もでき、幸せに暮らしていた。その子供はひとつ教えれば二〇も悟るほど利口な子供だった。ある日突然その子供がいなくなってしまった。悲しみにくれていると、廻国様が回って来て、いなくなった子供は恐山にいると教えた。その人が恐山に子供を捜しに行くと寺があり、そのお寺の和尚に子供の行方を尋ねた。和尚は、「その子をここへ呼ぶから自分の衣の陰に隠れていろ、決して子供にすがるな」と言った。子供が来て、「何々という者は来ているか」とその人の名前をいった。和尚は「来てない」というと、その子供は、「その名の男は自分が浜に打ち上げられたとき、金を奪って海に押し返した男だ。自分は亡霊だ」と言った。するとその人は泣き崩れてしまい、気が付くと、お寺だと思った場所には何もなく、コロモスギ（衣杉）があるだけで、その杉の下にうずくまっていた。そして、その人は帰って来なかったという。（下町　山崎夏子氏）」

「歌津敵討ち」の挿話では、漁師の死体から金を盗んだ男が、挿話の語り手である尼僧の夫であり、死んだ子供との対面の場所は恐山ではなく立山となっている。漁師が金を盗んだ夫婦の子として生まれ変わり、早くに亡くなることで復讐を遂げ、ついには自分が漁師の生まれ変わりであることを両親に告げるという話であり、昔話の「こんな晩」（大成番号　本格新三三）の構造に近似している。

山崎夏子媼（明治四五年生まれ）によると、この話は歌津町田の浦の実家で父親から聞かされたという。父親は「本」にもあった話であると言っていたそうであるから、明らかに「歌津敵討ち」の本を少しは媒介にしている。しかも山崎媼は、この話とは別に「歌津敵討ち」も要約して語れるわけだから、『小泉の民俗』[13]の採録資料と同様に別々な話として聞かされたものと思われる。

同型の話は岩手県三陸町根白・志津川町入谷・同町戸倉・女川町指ヶ浜[14]でも採録されているが、漁師が流れ着いたという清水浜（志津川町）ではその家が存続しており、子孫が不幸な目に遭うと、今でも漁師の祟りの話として伝説化されて繰り返されている。三陸町の小坪新太郎翁（明治三〇年生まれ）の話ではその「清水浜」が「九十九里浜」に、女川町の岩崎とし子媼（明治四〇年生まれ）の話では矢本町の「大曲」という漁村になっている。志津川町戸倉の後藤彦四郎翁（明治三八年生まれ）はこの話を鰹船の上で聞き「仏様バナシ」の一つと呼んでいた。以上のような伝承状況は、この因縁譚の方が「歌津敵討ち」が成立する以前から三陸沿岸を中心に口承の世界に流布されていて、「歌津敵討ち」の方が、それを挿話の一つとして取り込んだ可能性もある。当地で伝説化され信じられている話を取り込むことは、逆に「歌津敵討ち」全体を信憑性のある話として享受させ得るからである。

しかし、「歌津敵討ち」の中でこの挿話を聞いた人々にとっても印象深かったにちがいなく、「歌津敵討ち」というと、この挿話の方を思い浮べる人がいることは前述したとおりである。歌津町払川の山内泰助翁（明治四三年生まれ）によると、近辺の家のお年寄は「歌津敵討ち」の本を家族に読んでくれたことが多く、特にこの挿話は「清水の物語」と呼んで、知らぬ人はなかったという。[15]気仙沼市字小々汐の尾形栄七翁（明治四一年生まれ）によると、幼い子供を亡くしていつまでも後悔している人に対して、「歌津敵討ち」のこの挿話を語り、「バナカ（途中）で別れるワラス（子供）は敵だ」と言って、教え諭したものだという。[16]この、なかば諺化された言い方は「歌津敵討ち」の挿話を根底から支えているものである。前述した⑪の写本を作成した小野寺惣衛翁は三才になる子を亡くしたときに写本を志したというが、この挿話をガラス板の上で背中を丸めてなぞりながらどんなことを感じたのかが想像されるようである。

つまり、③の版本が「歌津敵討ち」を「實説美譚」と呼び、④や⑤のガリ刷り版が「白石噺と共に郷土の美談」と呼んで、親の仇討ちをした孝子の話を強調して出版や作成のねらいとしているものの、それを受け取る側には、挿話の方の、親に先立つ不幸をする子供に化けた漁師の祟りの話をあざやかに記憶した読者や聞き手が多かったのである。松岡主水という他国から来た武士に殺された両親

の仇を討つ孝子の物語である「歌津敵討ち」は、他国から流されてきた漁師の金を盗んだ夫婦がその子供によって仇を返されるという、ちょうど対称的な「挿話」によって相対化されている。立山に住む尼僧の語る話は、それゆえに全体のストーリィと対峙するくらいの重さがあり、それを見い出したのは「歌津敵討ち」の作成者であり、読者であり、聞き手であった。

このような、テクストの中に含まれている複層性は、テクストの読みの一元的な捉え方を禁じるのである。[17] たとえば、③の版本の扉になぜ幽霊のような絵が描かれているのだろうか。敵討ちが血の穢れに対する祓いや、[18] 人間の執心執着に関係があった[19]というような理由だけでなく、この挿話自体の影響による全体のイメージを描いたものと思われる。そして、「巻頭の挿絵」とは、「テクストがどのような形象を介して理解されるべきか、手掛かりを与え、読書行為を誘導する」[20]ものであるから、おそらくこのタイトル・ページの挿絵は、当時のこの版本を手にするだろうと思われる読者のイメージであり、挿話の方も広く語られていたという根拠に成り得るだろうと思われる。つまり、この口絵は「歌津敵討ち」のサブモチーフを示しており、写実を標榜しているかに見えるテクストの中に潜在する伝説的な話型を明らかにしているのである。

この挿話が「語り」として豊かだったと思われるもう一つの理由は、「人称の多重性」ともいえるような表現方法を用いている点である。たとえば、お筆と重治郎が立山の庵で出会った清水浜の尼僧は「誠に子細を語るもはづかしながら、是も佛のざんげに候得ば御噺し申也」と述べ、「元莱私は奥州仙臺本吉郡清水濱と申所の者にて…」（テクスト⑥）とこの「挿話」を語り始める。この場合、懺悔をする仏（死者）とは尼僧のかつての夫源十郎のことであり、この尼僧は夫に成り代わって「懺悔語り」を行なっている。さらに、話が進むにつれて、子供の姿をした漁師の亡者は、立山の僧の前で「元私は大船の船頭として諸国通船致し候所に難凌難風に逢ひ船をもみさかれしかば…」と最期の様子を滔々と語り始める。しかし、ここで亡者の語りを語っているのは、亡者の敵である源十郎の妻であり、彼女は死者になった夫の懺悔の語りを続ける中で、その夫によって供養のされなかったもう一人の死者になりきって一人称で語っているのである。つまり、加害者の懺悔の語りと被害者の怨霊の語りとが重ね合わされて成立している。この人称の解体と多称性は、ほとんど巫女の口寄せの語りに等しく、この尼僧は巫女の役割を果たしているのかもしれない。[21] そして、「人称の曖昧化・多重化」とは、とりもなおさず〈かたり〉の発話態度なのである。[22]

⑨のテクストを作成した鈴木多吉翁は、鰹船の上で「歌津敵討ち」を聞いたとき、語り手の吉田忠八翁が、この尼僧の語る挿話が始まるやいなや女性の声色に代えて語り続けたという。多吉翁は、そのような耳からの記憶があるために、「歌津仇討古老譚」を作成するときにはこの挿話が始まる寸前に「註」を記し、「私の記述上、主僧に代って其の噺しを説きますので、読者には宜しく其の心を心として読み下さいますように」と断り書きを入れている。

このような一人称で語る長い挿話が始まる前の注意書きは、音読

の機会が多かった本の場合には、あまり書き留められることはなかったようで、本の作成者が読者に黙読の姿を想定し、要請してくるにしたがって表れてくるようである。

たとえば、③の版本では、「誠に恥かしながら佛の懺悔に話さんとて左に説けり」と「主尼僧ハ元奥州仙臺本吉郡清水濱の…」と続く部分の間に、〈　〉の中に入れて「編者は記述上都合有て主僧に代りて其噺を説けり看過宜しく其心して讀れんことを」と記している。特に挿話の始まる直前に「左に説けり」と記す事は、このテクストがほとんど目で追うだけの黙読を想定して作られていることがわかる。前述した多吉翁が、この版本やあるいは版本の忠実な写本を見ていないわけだから、この本文に埋め込まれた注釈の一致は、本の作成に関して大事な問題を投げかけている。つまり、多吉翁は本を作成するときに、あたかも吉田忠八翁の語りに対する聞き手（多吉翁も含めた船員たち）の位置に、自分の本の「読者」を想定したわけであった。この場合、語り伝えから書き伝えへの伝承の変換を聞き手や読者とともに行っているわけである。

このような視点から、他のテクストもこの挿話の入口に注意して概観してみよう。本文だけが自然に流れているテクストは、①・②⑦・⑩・⑪などの筆写本と④と⑤のガリ刷り本、『郷土の伝承』に集録された⑥などである。このうち、明らかに形態上、③の版本を写したと思われる⑦、作成者の証言によって同じ版本から写したという⑩は、どのように表記されているだろうか。

まず、版本の「誠に恥かし乍ら佛の懺悔に話さんとて左に説けり」の部分は、⑦では「恥し乍ら佛の御罪を蒙りしため懸る處にて月日を送り暮し居りけるは」と書き直され「元は奥州仙臺本吉郡清水濱の…」と続く。他のテクストを参照したわけではないとするならば、これはテクストを忠実に模写したのではなく、本文がスムーズに流れるように改変したわけである。⑦が下大籠神楽の台本の原本として写された可能性もあることからして、台本の語りの上で不用な「左に説けり」という言葉や注釈は捨象されたものと思われる。

次に、⑩で、同じ部分は「誠に恥かし乍ら佛のざんげに話さんとて」に「私は奥州仙台本吉郡清水浜…」と続く。作成者の佐藤きくよ媼は、版本の「左に説けり」という文字を抜いただけで、上手に文章を続けている。きくよ媼は「歌津敵討ち」の筆写を続けるうちにその語り手ともなった人物である。彼女の場合も語りに不自然な箇所は削除して写していったものと思われる。⑨のテクストが、語りとして聞いたときの声色の変化から、故意に「註」を設けたことと、ちょうど逆のコースを歩んでいる。

以上のように、同じ写本という行為をともないながらも、写本を作成する者の内側に生じる能動的な「語り」の要請や、あるいは過去の「語り」の受動的な記憶を通して意識的に「本」を作成する場合などによって、テクストは少しずつ改変していくのである。

⑧も嵯峨立神楽の台本の原本として用いられたものだが、ここでは「誠ニ恥シ乍ラ佛ノ懺悔ニ話サントテ話始メタリ」と終止形で止め、次の「私ハ奥州仙台本吉郡清水浜ノ…」との間に「第拾壱節」を設け、「編者記述上都合ニヨ（リ）主僧ニ代リテ其話トケリ皆様

宜敷其デ讀可」という表題を掲げているが、これはほとんど版本の注釈に等しい。この写本の原本が③の版本であることが、この部分から立証される。

「歌津敵討ち」の本文と挿話との継目は、書承と口承との継目にも近似していて、その継目の表記の方法から、そのテクストのねらいのようなものが垣間見られるのである。

四、伝承現場としての鰹船

最後に、「歌津敵討ち」という本の流入現場や伝承現場としての鰹船の役割について簡単に報告しておく。

「歌津敵討ち」の写本について、その作成事情を聞き書きしていく中で、歌津の鰹船の中にあった原本を写したという事例は気仙沼の小々汐と唐桑町の鮪立で聞いている。

そのうち小々汐は、藩政時代から昭和の始めまで鰯の舟曳き網で賑わった漁村であり、夏には鰹漁の餌鰯を買うために、各浜の鰹船が立ち寄った。その中で、歌津の名足や石浜の鰹船から、小々汐の尾形東右衛門翁（明治二一年生まれ）が「歌津敵討ち」の本を借り受け、それを写したものを村内で回し読みしたという。同村の尾形丑之助翁（明治二二年生まれ）はその本を近所の家に持っていって読んだり、観音講やオサナブリのために本家に集まっていた村人たちに読んであげたりして、特に女性たちの涙を誘ったという。また、同村の尾形長吉翁（明治一二年生まれ）は「歌津敵討ち」を本を持たずに語る人で、家族や村人は、おのおの自由な格好で長吉翁を囲んで聞いた。およそ一時間くらいはかかったという。彼らは皆、故人になっているが、それらのことを記憶している尾形栄七翁（明治四一年生まれ）によると「歌津敵討ち」や「三代将軍様」（「田村三代記」）のような話は、「エッコマンマのような話（結句がエッコマンマで終える昔話のこと）のようであって、それでもない話」として、これらの話を総称している。[23] 一つの漁村の中で、同じ話が写本で黙読されたり、あるいは音読されたり、ただに語られている伝承状況が理解されるであろう。

鰹船に「歌津敵討ち」を持っていったという事例は、他に小野寺惣衛翁の長兄や次兄が鰹船で黙読した例がある。鰹船の甲板の上で船員たちに語った例は、前述した吉田忠八翁がおり、⑨のテクストの原本を要約して語ったことになる。「歌津敵討ち」の挿話のみを聞いた後藤彦四郎翁も鰹船で聞いている。

また、気仙沼市の小山宗雄氏（昭和八年生まれ）は、子供の頃、父親の亀藏翁といっしょに寝たが、特に寒い晩などには父の両足の間に自分の足を入れながら、「歌津敵討ち」などの様々な話を聞いたという。短い話などはエッコマンマで終えたが、「歌津敵討ち」、「義士銘々伝」などの長い話はそのようには終えずに、「鍋島の猫騒動」などは毎晩、続きを語ってくれたという。[24] その小山亀藏翁（明治三三年生まれ）も鰹船の名船頭であった。

以上のように、鰹船の中だけでも「歌津敵討ち」をめぐって様々な伝承状況があったことがわかり、この鰹船を通じて三陸沿岸の

浜々へ書物やその語りが広められていったことが確かめられる。特に、書物という物質が漁村に流入して、そのことによって口承の世界が豊かになっている事実は見逃すことはできないであろう。一般的には文字が語りを駆逐したと考えられがちだが、それは一面的な見方であり、ある程度の修正が必要だと思われるのである。

五、おわりに

本稿は始めに、「歌津敵討ち」という様々なテクストの書誌的な事項と、それらのテクストの用い方を聞き取り調査によって報告してみた。本やホンヨミをめぐる民俗として未だ知られることがなかった世界が現在においても広がっているように思われる。

次に、その「歌津敵討ち」の挿話のもつ根強い口承性に注意することで、テクストの内部と外部に見受けられる書承と口承との関わりについて、整理を試みてみた。

さらに、三陸沿岸にテクストそのものが流入する媒体として、明治から昭和にかけての「鰹船」という、当時においては日常的に広範囲に移動を繰り返していた、一種の交通機関に注目してみた。

「歌津敵討ち」というテクストをめぐって、本を黙読すること・本を音読すること・本を写すこと・本を作成すること・内容を要約して語ること・昔話のように語ることなど、様々な行為が複雑に入り組んでいることが理解されるであろう。語り伝え（口承）と書き伝え（書承）は交互に何度でも変換され、「歌津敵討ち」という一つの伝承世界を築いているわけであった。

それらの様々な「理解し、娯しみ、伝えていく」行為への、意志や、あるいは自然な衝動があるかぎり、口承であろうと書承であろうと、その媒体を選択することは、社会的な規制がありながらも、かつ自由であった。良き語り手や聞き手が失われていくなかにあって、「歌津敵討ち」という写本や作成本が、過去十年の間に、伝えるべき相手を想定せずに密室で自足的に作られ続けている理由も、それぞれがこの話（テクスト）に意味を見い出し、それまでに口承などによって伝えられてきた文化を用いてテクストを切り取り、関わってきたことに起因することは前述したとおりである。

一方には、昔話にも似た語られるテクストがあり、もう一方には文献資料としてのテクストがある。語りの場合、語り手も聞き手も「昔話」とは区別しているようだが、従来の口承文芸の分類からはみ出されるものながら、実に豊かな伝承を続けてきた。その対象は、語りだけでも、文献だけでも捉えることができず、その中間に多くの種類の伝承行為を想定できる。

口承文芸の熱心な採集者であればあるほど、現代において必ず出会うであろう一つのことは、「話者」が自分で語れる話自体を書いたノートなどを奥から出してくることに面喰うことである。その書き留められたものを、一度、言葉で語ってくれることを期待するのは採集者の方である。しかし、「書くということ」、あるいは「本」の形態をもったものを作成するということ、そのことの意味を探ることなしには現代の口承文芸の研究は成り立ち得ない。また、以上

のような「書物以前の書物」[25]とか「深層の書物」[26]とも呼ばれるような私的なテクスト作成の空間を捉え直すことは、逆に閉ざされた文献資料の積み重ねだけで口承文芸を明らかにしようとする方向へも多くの問題を投げかけられるように思われる。

〔注〕

(1) 川島秀一「「本読み」の民俗」（『口承文藝研究』第一七号所収・一九九四・日本口承文藝學會発行）

(2) 他に写本で多いのは「白石敵討ち」や「田村三代記」などがある。これらはいずれも気仙沼地方に比較的近い箇所での出来事や伝説を内容としたものである。なお、「田村三代記」は奥浄瑠璃の台本として研究の対象にされている（成田守『奥浄瑠璃の研究』［一九八五・桜楓社］参照）。

(3) R・シャルチエ『読書の文化史―テクスト・書物・読解―』（一九九二・新曜社）、R・シャルチエ編『書物から読書へ』（一九九二・みすず書房）参照

(4) 紀田順一郎『日本語大博物館』（一九九四・株式会社ジャストシステム）の第十章「営々と刻まれた一点一画―ガリ版文化の八十年―」を参照されたい。

(5) 宮城県教育会編『郷土の伝承』第二輯（一九三三）

(6) 一九九四年九月二五日、高橋義男氏より聞き書き

(7) 一九九四年一〇月一六日、高橋邦雄翁より聞き書き

(8) 一九九四年二月二六日、鈴木多吉翁より聞き書き

(9) 一九九四年九月四日、佐藤きくよ媼より聞き書き

(10) 一九九四年三月三日、同年九月二四日、小野寺物衛翁より聞き書き

(11) 『小泉の民俗』（一九八二・東洋大学民俗研究会）

(12) 「歌津敵討ち」には、もう一つの挿話として「白石嘶」という「白石敵討ち」の話を組み入れているが、三陸沿岸の口承世界では語られていない。

(13) 一九八九年一二月一七日、山崎夏子媼より聞き書き

(14) 志津川町入谷は『志津川町誌Ⅱ生活の歓』（一九八九・志津川町）に「船頭の生れ変わり」という標題で、女川町指ヶ浜は松谷みよ子編『女川・雄勝の民話』（一九八七・国土社）に「恐山で見た者は誰」という標題で、それぞれ採集されている。他の二例は川島採録。

(15) 一九九四年九月一八日、山内泰助翁より聞き書き

(16) 一九九四年九月三日、尾形栄七翁より聞き書き

(17) R・シャルチエ『読書の文化史―テクスト・書物・読解―』（一九九二・新曜社）参照。

(18) 折口信夫「仇討ちのふおくろあ」（『折口信夫全集』第一五巻［一九七六・中公文庫版］所収）

(19) 筑土鈴寛「蝶と獅子」（『筑土鈴寛著作集』第四巻［一九七六・せりか書房］所収）

(20) R・シャルチエ『読書と読者』（一九九四・みすず書房）

(21) 野村純一氏も「「こんな晩」への足取り」（『日本の世間話』

〔一九九五・東京書籍〕所収）の中で、同型の話に触れられ、「この手の話が広まっていく過程には、霊媒者としてのイタコの存在があったのかもしれない」と述べられている。

(22) 坂部恵『ペルソナの詩学』（一九八九・岩波書店）・同著『かたり』（一九九〇・弘文堂）参照。なお、福田晃氏は「語り物・演劇としての制約からおこってくる単純な叙述展開を「中入れ」によって打ち破る方法」として、「登場する人物が、他の人物に事件を語って聞かせるという形で、劇中劇の構成をとる」ことを述べ、それを「物語構成の「重層化」」と呼んでいる（福田晃『中世語り物文芸』〔一九八一・三弥井書店〕所収）。「歌津敵討ち」全体が〈語り物〉として語られた可能性を開くものとして示唆に富む。

(23) 注(16)と同じ

(24) 一九九四年九月七日、小山宗雄氏より聞き書き

(25) ダニエル・ロッシュ「社会生活のなかの文字文化」（R・シャルチエ編『書物から読書へ』所収）

(26) 紅野謙介『書物の近代―メディアの文学史』（一九九二・筑摩書房）

付記一　本稿は一九九四年三月十二日の日本口承文芸学会例会の発表時の草稿をもとにしている。発表の折、多くの方々から御教示をいただいたことを御礼申し上げる。

付記二　本稿の脱稿後、志津川町の入谷という山間部から「歌津敵討ち」の版本（本稿の③と同じ）一冊（字桜葉沢の佐藤長栄氏所蔵）とその写本三冊（字押館の阿部一三氏〔昭和七年生まれ〕が昭和四八年と昭和五八年に作成）を拝見することができた。阿部氏にとっても細浦出身の母親のつねよ媼（明治二八年生まれ）から「歌津敵討ち」と細浦周辺を舞台にした例の挿話を幼い頃から聞かされていたことが写本を作成する動機になっている。なお、気仙沼市の小野寺惣衛翁（本稿⑪の写本の作成者）は現在、「歌津敵討ち」の現代語訳を試みて、新しい〈本〉を作成中である。

（かわしま・しゅういち／気仙沼市史編纂室）